

2008年度受託研究概要報告

身障者に対するの衣服リフォームに関する調査研究

研究メンバー

見寺貞子 デザイン学部ファッションデザイン学科教授

委託者

株式会社 ハップ

1 はじめに

高齢化に伴い障害も併せ持つ高齢障がい者が増える中、より多くの人たちに快適でおしゃれなファッション環境を提供することは、ファッション産業を担う供給者側としては最も考えていかなければならない課題である。しかし、既製服(不特定多数の人々の重要を見越して一定の規格により工場生産販売される衣服のこと)のサイズ規格にはJIS(Japanese Industrial Standard)が使用されており、すべての生活者に適用するとは言いがたい。現在、その対処として既製服の一部をお直しする、別のデザインにリフォームする、自身のサイズに合うお誂え服を仕立てるなどの方法が取られている。本調査研究は、今後最も増えるであろう片麻痺者に対し、心身ともに快適な衣生活を営むために、既製服を「お直し」という観点から調査研究し、その市場性から今後の課題を明らかにする。

2 高齢障がい者の衣生活調査を通じて

兵庫県下の障害者団体(しあわせ会、むつみ会)を中心にアンケート及びヒアリング調査を行い、衣生活への意識や要望や問題点を抽出した(写真1)。結果は、以下のとおりである。

2-1 既製服に対する問題点

既製服市場の満足度について、満足している人が23%、普通が32%、不満足の人が26%、わからない人が19%で、サイズや志向、服種、バリエーションに関しての不満があげられていた。お直しでは、ズボン丈、ウエストサイズ、袖丈と、丈と周囲長に問題点があげられた。この要因は、障害内容との関わりが大きいと考える。片麻痺とは、身体の片側に脳血管障害の後遺症による麻痺が生じる疾患で、人体形状は前後左右差があると同時に人体の振れ、傾き、変形のある左右非対称である。また、車いす使用者

は座位姿勢であるため、立位とは異なる体型でありさらに左右差もある。健常者の立位姿勢を基本としたJISが既成服制作の基本となっているため、肢体不自由者には、丈と周囲長に支障が生じ、既製服に適合しない結果となった。

2-2 歩行中に生じるずれ

片麻痺者は、歩行中や身体を動かしている時に衣服のずれが生じる場合が多い。ヒアリング調査では、冠婚葬祭などで着るジャケットの患側の肩が落ちる。首まわりは、患側に引っ張られ開く。歩いていると衣服がねじれ歩きにくい、などがあげられた。

2-3 お直しの経験と部位

お直しでは、ズボン丈が最も多く、袖丈、上着丈が多い。幅寸法や回り寸法、付属材料の交換、デザイン変更などリフォーム箇所が多岐にわたっていた。

2-4 リフォームの価格について

普通から高いが多かった。中には、「お直しするより、購入したほうが安い。」という意見もあげられた。安く着やすいのでユニクロで買うことが多い。という意見もあげられた。

2-5 今後欲しいと思う衣服—生活シーンに対して

若々しく活動的、自分らしく個性的など自己のイメージをしっかりと持っている人が多く、普段着でもおしゃれな外出着への要望が多くあげられた。食事や買い物、趣味や勉強会など、多様な生活シーンや活動目的に対応した衣服が望まれた。

2-6 今後欲しいと思う服種

パンツルックやプレザー、ジャンパー、スーツなどで、志向としてあらたまり意識のある衣服への要望が高かった。

2-7 イベント開催について

ファッションに関してのイベントは、男性は必要なし、女性からはファッションセミナーやお化粧講習会、カラーコーディネート、ファッションコーディネート講座の要望があげられた。衣服の販売会では、男性は必要なし、女性から要望があげられ、パンツ、ベスト、ブラウス、ジャケット、コートなど、気軽に着れるおしゃれな日常服に人気が集まった。また雑貨のイベントの要望もあげられた。

3 今後の展開

本調査研究では、今後最も増えるであろう片麻痺者を対象とし、既製服を「お直し」という観点から調査研究し、その市場性を明らかにした。調査結果から、お直しへのニーズは、重度障がい者にはあったが、軽度障がい者にはニーズが見いだせなかった。要因としては、重度障がいになるほど既製服が合わなくなり、お直しが必要となるが、軽度の場合は既製服のサイズで調整する。また、お直し価格が高くて、少々の着心地の悪さは我慢する傾向にあった。一方、意識調査からはファッションに対しては関心があり、お直し以外のファッションイベントや衣服の販売会に女性の興味が高かった。事例として、高齢者施設でリフォーム&衣服販売会を開催した結果、既製服販売に人気を集まり、ブラウスやベストが販売された。ヒアリング調査からは、街中の婦人既製服ショップ内に、障害に対する情報提供や対応商品の展開、お直しのサービスなどを行って欲しいという要望が多くあげられた。また、展開場所に関しては、高齢障がい者のアクセスが良い場所、たとえば多くの人が集まる病院や高齢者施設の近くであれば、ファッションに関する情報がより早く収集でき、快適な衣生活の普及になるとの意見もあげられた。これらの意見をさらに掘り下げれば、市場のニーズの掘り起こしが可能になると考える。今後、より多くの人たちが、快適な衣生活を送るための情報発信と商品供給、それらを市場に結び付ける社会システムを創り上げることが早急に望まれる。



写真1 衣生活に関するアンケート調査

4 ユニバーサルファッションをめざして

私たちは、「生涯、健康で自立して生きたい。」と思う。健康とは、単に病気や虚弱体質という意味ではなく心身ともに良好な状態にあることを示す。中でも快適な衣生活を営むことは、健康に生きることへの大きな足がかりになる。高齢者が関心を持っているおしゅれは、男女とともに外出時であり、多くの高齢者が身だしなみに気を使っている。化粧講習会を試みた施設では緊張を生むためか、高齢者が目に見えてイキイキしてきたという報告もある。「高齢者保険福祉推進十か年戦略(ゴールドプラン) (1989年)の柱のひとつである「寝たきりゼロへの10ヶ条」でも、どんな衣生活を送るかが寝たきりを防止する重要な要素であることを示している。たとえば、「暮らしの中でのリハビリは、食事と排泄、着替えから」(第4条)などは、日常当たり前に行っている衣服の着脱行為も、繰り返すことにより身体機能のリハビリテーションとなり、残存能力の活性化につながることを示している。おしゅれを意識することで気持ちがリフレッシュし、生活が楽しくなる。衣服で装うと人に見せたくて外出したくなる。つまりおしゅれ心は、他者とのコミュニケーションや社会参加の促進にもつながるのである。今後の高齢社会に伴い、私たちの生活スタイルは大きく変化する。第一線を退いた後の20~30年間を第2の人生として自らが管理し計画していかなければならない。多いにおしゅれ心を開花させ、生涯健康で楽しく暮らしていきたい(図1)。

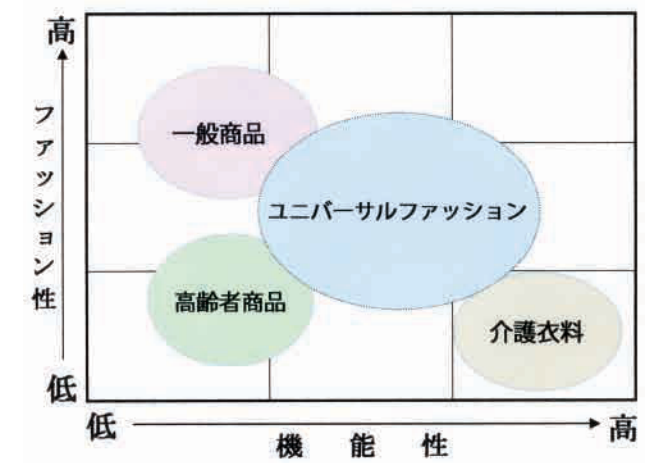


図1 ユニバーサルファッションのポジショニング